

玉川上水緑道にみる緑地と住民との関わりの変遷

Changes of the Relationship between Green Spaces and Residents on Tamagawa Josui Green Way

山下 結* 伊藤 弘* 小野 良平* 下村 彰男*

Yui YAMASHITA Hiromu ITO Ryohei ONO Akio SHIMOMURA

Abstract: This study aims to clarify the changes of the relationship between green spaces and residents on Tamagawa Josui Green Way and to get hints on green preservation method. Changes of the relationship are considered by Policy changes, place changes and residents' consciousness changes. As the result of the study, from Edo era to 1950, Green Way was not intimate and was only visited for seeing cherry blossoms because Tamagawa Josui is at the edge of the villages. From 1950 to 1970, new community was created around Green Way through urban expansion. Green Way was very appreciated as a natural spot with images of Musashino by the immigrants. From 1970 to 1990, Green Way lost natural charm by artificial park construction and Tamagawa Josui drain. Residents started preservation activities. Since 1990, the image of Musashino with copses and canals revived on Green Way. In recent years cafes and concert houses appear along Green Way. Residents are enjoying Green Way in their daily life by designing their gardens or houses to melt into Green Way. As a result, it is suggested that the Tamagawa Josui scenic zone using the image of Musashino kept Green Way. When green space connects surround, residents tend to appreciate green spaces and to have daily relationship with green spaces.

Keywords: Tamagawa Josui, green spaces, residents' consciousness

キーワード：玉川上水，緑地，住民意識

1. 背景・目的

都市において緑地は貴重な存在としてその保全が重視され、自然観察や遊びの場、保健休養、気候調整、景観の美化や地域らしさの創出など様々な役割を果たしている。都市の中の自然的環境である緑地は、ほとんどがそれ自体の自然変化よりも、人との関わりの変化によって活かされたり失われたりしてきた。人に必要とされなくなった緑地は開発されたり、荒れたりする一方で、新たな価値が見出されて違う形で残されていく緑地もある。したがって緑地保全においては単なる自然環境保全ではなく、緑地と人との関わりを保全あるいはその創造が重要だといえる。

緑地と人との関わりは、この半世紀あまりで劇的に変化している。それは都市と人の意識双方の変化によって起こったと考えられ、緑地を保全する上ではこれらの変化をうまく踏まえる必要がある。しかし緑地と人との関わりを構築しなおすのは簡単なことではなく、緑地保全における課題となっている。特に都市の緑地と地域の住民が日常的な関わりを持てるようにするにはどうすればよいだろうか。本研究ではこれまでの緑地と住民との関わりの変遷を、都市の変化と住民の意識の変化から明らかにする。その結果出現した空間が、どのように人々の日常生活の中に取り込まれているかを考察することで、今後緑地と住民との関わりを維持あるいは創造する手がかりとなると考える。

既往研究では、緑地の変遷を政策・施策や都市の変遷から追ったものは多くある²⁾など。緑地の変遷が緑地と住民との関わりに与えた影響を考慮した研究は少なく、上山らの親水公園ができたことによる周辺土地利用と建築設計に及ぼす影響の研究³⁾があるが、親水公園は水辺・親水性の比重が高いので、緑地保全を考えるにはさらに動植物を含んだ総合的な緑地を対象とした方が好ましいといえる。また、歴史が長い緑地を対象とした方が、都市の変化や住民意識の変化をはっきり示せると考える。

本研究で対象とする玉川上水については歴史・分水・水路・土木技術に関しては多数の研究⁴⁾などがあるが、緑地として注目した

研究は土壌の研究⁵⁾のみであり、前述の緑地と人との関わりについては未だ研究がなされていない。玉川上水は緑地としての価値も高く、今後の保全および管理を考えるに当たっての研究が不十分であるといえる。

2. 対象地・方法

(1) 対象地

本研究では、対象地を玉川上水緑道の中でも緑道の幅が広く、緑道と住宅地が隣接する区間である金比羅橋～小川橋区間約3km(立川市・小平市域)とした(図-1)。玉川上水は江戸時代に開削され上水道に使われるとともに、堤の小金井桜で有名な緑地であった。戦後の都市化を経て、堤に残る樹林地部分を利用して玉川上水緑道として整備されている。長くの時を経て今なお親しまれる緑地であり、住民との関わりの変化を見るのに適切といえる(以降“玉川上水”は水路部分を指し、“緑道”は玉川上水の堤の樹林地部分を指すものとする(図-2))。

(2) 方法

前述のように緑地と住民との関わりの変化は都市と住民意識の双方の変化によって起こると考えられる。そこで緑地と住民との関わりの変遷を都市の変遷と住民意識の変遷から明らかにした。都市の変遷は、さらに玉川上水に関連する都市計画・緑地計画等の施策の変遷と緑道と隣接する周辺空間も含めた空間の変遷に分けて把握した。そして緑地と住民との関わりの変遷を経た結果、現在住民がどのように緑地を日常生活に取り込んでいるかを外構設計から把握した。外構設計には当該宅地周辺の環境である緑地に対する住民の意識が反映されやすく、住民による緑道への関わり方の一形態である日常生活への緑地の取り込みと捉えることができると考えた。最後に玉川上水緑道沿いの緑地と住民との関わりの変遷から得られる知見を考察した。

*東京大学大学院農学生命科学研究科

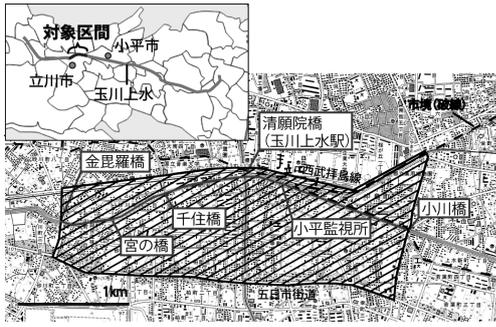


図 - 1 対象地[1:25000 地形図立川(2006)をもとに作成]

1) 施策の変遷

江戸時代から現在に至るまでの玉川上水および緑道に関する施策の変遷を整理した。玉川上水・緑道の主な管理者である江戸・東京の施策を対象とし⁷⁾、玉川上水に関する文献、東京都の都市計画・緑道計画・景観保全施策に関する行政資料より把握した。

2) 空間の変遷

玉川上水・緑道およびその周辺空間(図-1 斜線部)の変遷を明らかにした。

玉川上水の開削および周辺の開拓に関しては文献・市史を参照した。周辺空間の変遷は国土地理院発行の2万5千分の1地形図と空中写真から把握した。地形図は地形図履歴リストに載るもの⁸⁾を全て収集し、空中写真は国土交通省国土政策局の航空写真画像所在検索・案内システムにより検索したもの⁹⁾を利用した。緑道沿いの開発はより詳細に把握するため、住宅は住宅地図¹⁰⁾から建物の建設年と現在の住民が住み始めた年を把握した。建て替えについても1987年以降は住宅地図の表記の変化から把握した。公共施設は住宅地図が発行される以前に建設されたものが多かったため、住宅地図の他に各施設の文献・ウェブサイトも併用し建設年を把握した。

玉川上水の状況および緑道の植生は、過去の写真、緑道に関する調査・計画資料、工事台帳および住民の証言資料からまとめた。

3) 緑地に対する住民意識の変遷

当該地域で玉川上水・緑道および周辺の緑地の保全活動を行っている主な住民団体の一つである“小平市玉川上水を守る会”(会員数150名)の会報『玉川上水』の中の地域の長老へのインタビュー記事と住民による随筆から住民意識を把握した。この団体は1974年の設立時から都に対して玉川上水保全や緑道のデザインや管理への意見提出を続けており、都の施策にも反映されている。まず地域の長老へのインタビュー記事から、戦前までの緑地に対する住民意識をまとめた。次に住民が保全活動を始めるに至った意識を把握するため、会報第0号(1974年発行)～第5号(1978年発行)¹¹⁾の5年間に書かれた25人分の随筆を分析した。団体の中での活動が長くなると意識が統一されていくことも考えられるが、活動開始当初ならば個々人の意識が表れると考えた。分析方法は、随筆文中から玉川上水の景観要素に関する語(植物・動物・水・歴史・文化)を抽出し、何人が使用しているかを

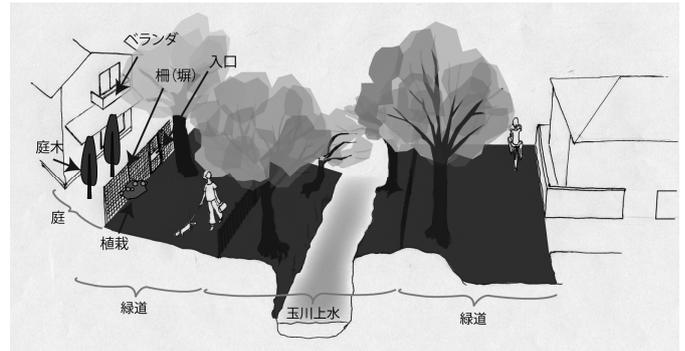


図 - 2 対象となる玉川上水緑道と住宅の外構設計

数えた。また玉川上水・緑道への感想・意見を表す文を抜き出しまとめた。

4) 外構設計

緑道に敷地が隣接する住宅(図-3)の外構設計を現地調査した。具体的には緑道に面する境界の柵(塀)、敷地への入口、庭、ベランダ、および庭木・生垣・柵の外に添った植栽の有無を調べた(図-2)。柵は一部行政が設置しているものがあるため住民が設置した柵とは区別して記録した。入口については入口が無くても緑道に接続する道路が家に接している場合は区別して記録した。植栽の季節変化を考慮して、夏と冬の2回調査を行い、常緑樹・落葉樹の区別をした。植栽以外は、2010年12月31日に調査を行った。

3. 施策の変遷

(1) 開削

1603(慶長8年)江戸幕府が成立すると、江戸市内では急激に人口が増加した。人口を支えるための水源・農地の開発が武蔵野台地で次々に行われた。対象地域が初めて開発されたのはこのときで、玉川上水は多摩川から江戸へ水を引く水道として1653(承応2年)に開削された¹²⁾。またその前後で新田開発により砂川村・小川村がつくられた¹³⁾¹⁴⁾。

(2) 緑地ネットワークへの組み込み

1939(昭和14年)の東京緑地計画の中では、当該地域は“武蔵野景園地”とされ、玉川上水は公開緑地第二種(二)とされた。武蔵野景園地は平林寺(埼玉県新座市野火止)から野火止用水・玉川上水を繋ぐハイキングコースとある¹⁵⁾。また公開緑地第二種(二)とは直接公衆ノ用ニ供スル国又は公共団体ノ施設ニシテ緑地トシテ認定シタルモノとされる¹⁶⁾。都心と多摩地区にまたがる線的な緑と水を持つ玉川上水は、水道用地という性格上公有地として確保されており、この頃から緑地のネットワーク構想に組み込まれていたことがわかる。

戦後、東京の市街地拡大を背景として1957(昭和32年)から始まった三多摩地区全域の都市計画改定に伴い、1962(昭和37年)には玉川上水風致地区が指定された。立川市の玉川上水風致



図 - 3 外構設計の調査対象とした住宅の位置[ゼンリンの電子地図帳(2007)に修正・加筆]

表-1 江戸・東京における施策

西暦	和暦	施策	概要
1624	寛永1年	砂川新田開発	五日市街道を軸とした農村集落。現在の立川市北部。
1653	承応2年	玉川上水完成	江戸市内の水運として羽村取水口～四谷大木戸を開削。
1656	明暦2年	小川新田開発	青梅街道を軸とした農村集落。現在の小平市西部。
1939	明治44年	武蔵野景園地指定	東京緑地計画による。玉川上水は公園緑地第二種(二)とされた。
1962	昭和37年	玉川上水風致地区指定	三多摩地方都市計画改定の一環。立川市・小平市・小金井市西部の区間。
1965	昭和40年	淀橋浄水場廃止	これにより小平監視所より下流通水停止。
1972	昭和47年	玉川上水緑道整備開始	柵・護岸工事、ベンチ設置、植樹等を行う。区間を分けて順次整備。
1981	昭和56年	玉川上水緑道開園	整備終了区間から順次開園。
1986	昭和61年	『清流の復活』事業	小平監視所下流の通水を再開。
2001	平成13年	歴史環境保全地域指定	羽村取水口～四谷大木戸の開渠区間。新たな植生管理方針の導入。
2002	平成14年	玉川上水景観軸	羽村取水口～浅間橋の区間。玉川上水路の中心から両側100mの範囲。
2003	平成15年	国指定史跡登録	羽村取水口～四谷大木戸の開渠区間。
2010	平成22年	史跡玉川上水整備活用計画	玉川上水路・法面の崩壊防止。景観維持のため樹木伐採等を行う。

地区の指定理由書には、「武蔵野の野趣をとどめる景勝地であるため」¹⁷⁾とあるが、計画案を作成した都市計画協会による風致地区の説明には「歴史的遺産の一つである玉川上水等の用水路を可及的に保存し、ハイキング・コースの緑道を計画するとともに、一部低湿地を活用した人工湖中心の公園計画と、将来の下水分流式採用を前提としたところの、小河川水路沿ひの緑道化によって、前述の各大緑地(※井の頭公園・小金井公園など)相互の連絡組織系統を完備することが望ましい。」¹⁸⁾とあり、風致保全に留まらず前述した緑地ネットワークとしての活用が目指されていたといえる。同時に立川市・小平市では五日市街道・青梅街道も一部風致地区指定されている。街道沿ひの屋敷林の帯を保全する目的¹⁹⁾だが、こちらは市を跨いで風致地区が指定されてはおらず、緑地ネットワークというよりは街並みを残す意図が主と考えられる。

(3) 水道網の変更

玉川上水は開削当初から東京の上水道として使われてきたが、1965(昭和40年)の新宿副都心計画に伴う淀橋浄水場廃止により、上流を残してそれより下流では水道網から外された。旧水道網では多摩川の水が玉川上水経由で新宿の淀橋浄水場に送水されていたが、新水道網では玉川上水の半ばに小平監視所を設け、監視所から下流では玉川上水に水を流さずに別のルートを使って全て東村山浄水場へ送水されるようになった。これにより小平監視所下流で通水が停止された¹⁹⁾。

(4) 緑道整備

東京都建設局が東京都水道局から水道用地の一部を借り1972(昭和47年)より緑道化事業が開始された²⁰⁾。緑道の計画は財団法人日本都市センターに委託され、1973(昭和48年)玉川上水利用基本計画調査報告書『玉川上水みどり計画』が作成された。この計画においてもネットワーク化という文言がみられる。植生管理方針・緑道のデザイン・拠点施設などが提案されているが、植生管理は潜在自然植生であるシラカシ群集に導く方針であり、林床にササが多く樹木がまばらな上流には緑道整備の際に木を補植し豊かで安定した「みどりの帯」を育成するとされている²¹⁾。これを基に、下流から順次柵や護岸工事・植栽等が行われ、1981年(昭和56年)から玉川上水緑道として開園された。

(5) 清流の復活

1986(昭和61年)に小河川や水路に清流を復活させ、潤いのある環境づくりに努めるために、通水が停止していた下流に水を送る施設整備が行われた²²⁾。新たに設けた多摩川上流処理場で下水を浄化し、そこから地下の水道管を通して小平監視所のすぐ下流の放流口に送水し、通水がストップしていた区間に流されるようになった。

(6) 歴史的景観保全

2001(平成13年)に東京都における自然の保護と回復に関する条例により、玉川上水の開渠区間は歴史環境保全地域に指定された。同時に新たな植生管理方針が導入されており、対象地では

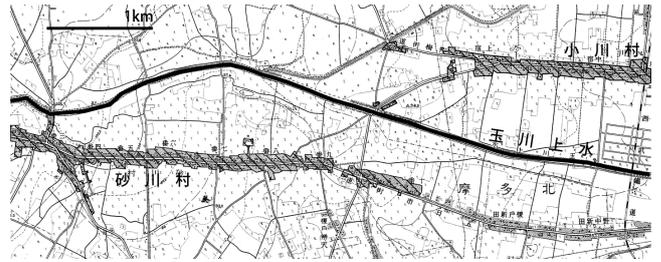


図-4 玉川上水と集落の位置[1947年地形図に加筆]

雑木林を保全するとされた²³⁾。

2002(平成14年)には玉川上水景観軸が設定され、玉川上水の中心から両岸100mの範囲で高さ10m以上の建築をする際に届出が必要になった。景観形成の目標は、玉川上水や河川沿ひの水と緑を帯状に連続させ、親水空間の拡張を図るとともに、周辺の歴史的・文化的遺産を生かした街並み整備を合わせて実施し、季節感や潤い、玉川上水の歴史が感じられる景観形成を図るとされる²⁴⁾。

2003(平成15年)には玉川上水が文化財保護法による史跡に登録された²⁵⁾。また現在2010(平成22年)から10箇年で史跡玉川上水整備活用計画が行われている。以前から問題視されていた玉川上水路と法面の崩壊対策と、歴史的な景観に合わせた樹木の整理等が行われている²⁶⁾。

4. 空間の変遷

(1) 周辺空間

1) 開拓(江戸時代から昭和初期)

新田開発以前には街道はあったものの集落がなく全くの荒野であったとされる²⁷⁾。荒野に玉川上水が開削され、街道に沿って砂川村・小川村が開発された。各集落は武蔵野の新田集落にみられる特徴的な短冊形地割がされていた。各集落には玉川上水から分水された用水路が通っていた。玉川上水と2つの集落の位置関係は図-4のようになっており、玉川上水の周囲に家屋はなかった。

2) 樹林地への大型施設開発(戦時期から昭和40年代)

玉川上水沿ひは長らく農地・樹林地あるいは草場が広がり建物や工場はなかったが、戦時に日立航空機立川工場が建設された。その工場の南端にあった作業用の軌道を利用して1950(昭和25年)に西武鉄道が開通し、玉川上水駅ができた²⁸⁾。1950～1970年にかけて都営団地やごみ焼却場²⁹⁾、国立音楽大学寮³⁰⁾が建設された。

これらの大型施設はいずれも樹林地に建設されており、その結果、玉川上水周辺にあった樹林地はほぼ無くなった。

3) 住宅建設(昭和30年代以降)

1960年代以降は農地の宅地開発が始まり、戸建住宅やアパートが次々と建設された。1980年代に一旦停滞するが、1990年代から再び開発が進められており、農地は減少を続けている。

4) 集客施設建設(平成4年以降)

近年緑道沿ひに喫茶店等の集客施設が建設されるようになった。特に小平監視所から下流に集中しており、子供向けのコンサートを開催するライブハウス(1992年築)、喫茶店(2000年築・2004年築)、ごみ焼却炉から出る熱を利用した足湯(2007年築)が建設された。小平監視所から上流ではやや遅れてコンサートや展示会も開催される喫茶店(2010年築)が建設された。

(2) 玉川上水・緑道

1) 植生管理(江戸時代～戦前)

開拓以来、周辺集落の雑役によって水路の補修や両岸の草木の刈り取りが行われた。護岸のため堤には樹木が列状に植えられた。小川村では定期的な伐採し薪としていた³¹⁾。樹種は不明だが、戦前には太さ20cmほどになったら切っていた³²⁾とされ、薪炭林と

似た扱いだったと考えられる。

2) 放棄 (戦時期から昭和30年代)

戦時期以降、堤の樹木が刈り取られなくなったようである³¹⁾。写真³³⁾・資料²⁰⁾より1973(昭和48年)の時点で緑道はコナラ・クヌギ等の二次林であることから、少なくとも戦前から対象地の植生はコナラ・クヌギ等の二次林であったと考えられる。伐採されなくなったことで草木が繁茂し、樹木は以前より樹高が高くなり大径化している。また、小平監視所から下流では1960(昭和35年)以降降水量が激減した³⁴⁾。周辺に住宅ができると下水の流入やゴミの放置も発生した³⁵⁾。

3) 緑道整備 (昭和40年代以降)

玉川上水風致地区指定のあと歩行者用転落防止柵が設置され始めた³⁶⁾。対象地では、1976(昭和51年)の時点では小平監視所から上流では区間により木杭と鉄線による柵あるいは青のメッシュフェンスが設置されており、小平監視所から小川橋右岸には柵が設置されていなかった³²⁾。小平監視所から小川橋は1981(昭和56年)・清願院橋から金比羅橋は1983(昭和58年)の緑道整備の際に新たな柵が整備され³⁷⁾、全区間で柵が設置された。小平監視所から上流の依然水道として使用されている区間では柵の高さは約2m、下流の通水停止区間では腰の高さほどであり区間によって異なる。植栽の管理は放置あるいは新たに植樹し樹木を増やすものだったため、水路の法面や法肩に樹木が増加し、元々の植生にはなかった常緑樹が発生した³⁵⁾。また樹木が大きくなりすぎたことで、水路の崩壊の危険が高まり問題となった。水路崩壊の防止のため、木の杭や金属メッシュが施された³⁵⁾。

4) 清流の復活 (昭和60年代)

1986(昭和61年)に小平監視所下流で通水が再開した。緑道整備で柵が設置されてから玉川上水内に立ち入ることはできなくなっていたが、この事業で水面まで下りていくことができる橋が造られた³⁶⁾。橋の途中には飛び石状の工夫があり、また放流口も岩を積んだようなモニュメントから水が溢れ出すデザインがされ、親水性を強く意識した空間ができた。

5) 雑木林保全 (平成13年以降)

植生管理はそれまで放置されている状態であったが、雑木林を維持するため適宜伐採されるようになった。2010(平成22年)からの玉川上水整備活用計画では、元の雑木林の植生ではないシユロ・アオキ等の常緑樹が選択的に伐採され、水路保全のために法面や法肩の樹木と水路の沿いの大径木が伐採された³⁸⁾。

5. 住民意識の変遷

(1) 初期の評価

「私も含め玉川上水は昔から江戸市民のもので遠くにある存在として映っていますね。ですから玉川上水というイメージは此の処の人々にとって小金井桜の花見との関連で捉えているというのが一般的だと思いますよ。寧ろ生活用水である庭先を東西に走る小川用水こそ身近なものとして感じてます。」³⁹⁾と語られている。玉川上水は水質を維持するため直接利用することは禁じられており、日常的に使われるのは玉川上水から分水された用水であった。またかつての玉川上水は水量が多く水死者が少なくなかったため、「人喰い川」の異名があった。

(2) 評価対象の変化

評価対象は、「自然」がもっとも多く14人、続いて武蔵野(7)、新緑・若葉(7)、エゴノキ(6)、草(6)、雑木林・雑木(5)、蛍(5)、野草の列挙(4)、歴史(4)、木立・木々・枝枝(4)、クヌギ(3)、落葉(3)、枯れ木・裸木(3)、鳥(3)、風(3)、清流(3)、せせらぎ(2)、小川(2)、桑畑(2)、山(2)、文化(2)、桜(2)、松(2)となった(()内は人数)。四季を通じて総合的に評価されているといえる。「武蔵野の一角、玉川上水のほとりを、理想

教育の地として建てられた母校(明星学園)に小学生として入学した昭和4年4月、それが私と上水の出会いでした。」の言説の他、25人作者中16人は移り住んできたか、練馬・横浜などの都市部在住者であると記されており、対象地周辺の開発がきっかけとなって玉川上水が積極的に評価されるようになったと考えられる。「玉川上水がこんなに身近にあったことを発見した喜び」「東京にまだこんな所が残されていたのか」「東京の間近にこんなにも美しい自然がひっそりと残っている」等の表現からは地理的な意外性や都市開発との対比による価値認識が読み取れる。「武蔵野」の使用は、「武蔵野の開拓」のように地名を指すものもあるが、「武蔵野の自然」「武蔵野の面影」「武蔵野の田園を想起させる小川の春」「武蔵野の風趣」「武蔵野の姿」の文脈で使用されており、武蔵野という広いエリアに対するイメージを玉川上水・緑道の風景の中に見出していたと考えられる。玉川上水の水量の減少や、緑道への柵やベンチの整備など人工的な改変とそれに伴う草木の伐採や衰退を憂う意見があり、風景が変わっていくことへの危機感が保全活動の動機になったと考えられる。

6. 外構設計

柵がある宅地には、左岸では入口がある場合に柵の外に常緑樹や園芸植物等の植栽がある割合が多かった(表-2および図-5)。入口を設けることで庭と緑道の往来が容易になり、緑道を日常生活に組み込んでいることが考えられる。右岸では入口の有無と柵の外の植栽の有無に関連性がなかったが、これは住宅が作業用道路に面しており、植栽するスペースがないことが大きく影響していると考えられる。その代り、近年右岸では北向きにベランダを設置する傾向がみられる。1997年築のものが一番古いが、2000年代にこの傾向は顕著になり2000年代に建てられた住宅21軒のうち8軒が北向きにベランダを設けていた。家を建てる段階からすでに緑地を評価して、景観を享受しようとする傾向が強くなっていると推測される。

7. 緑地と住民との関わり

(1) 関わりの変遷

今まで把握してきた施策・空間・住民意識の変遷から、緑地と住民との関わりの変遷を整理する(表-3)。

表-2 柵・入口の有無と柵外の植栽の有無の関係

左岸(北)N=64		植栽あり	植栽なし
柵なし	n=5	—	—
柵あり	入口あり	n=27 89%	11%
	入口なし	道路沿い n=13 42%	31%
	n=19	58%	
右岸(南)N=54		植栽あり	植栽なし
柵なし	n=5	—	—
柵あり	入口あり	n=28 29%	11%
	入口なし	道路沿い n=10 27%	31%
	n=11	58%	



図-5 柵の外に植栽がある住宅の例

1) 疎外 (江戸時代～1950年頃)

対象地域では玉川上水・緑道はもともと集落の裏のはずれに立地していた。住民意識においても玉川上水は“江戸の上水”“人喰い川”と言った遠ざけられた存在で、緑道は小金井桜の花見という春限定の利用であった。緑道にはもともと護岸用の樹木が植えられていたが、当該地域では薪炭にも利用しており現在より木は細く樹高も低かった。

2) 発見 (1950～1970年頃)

大型施設の開発により樹林地が減少した。集落の裏のはずれという位置づけもあり開発されやすかったといえる。新たに鉄道が開通し学校や団地が建設され、都心から人が移り住むことで玉川上水の周辺に新しいコミュニティが形成された。周辺の開発が進んでいったことが、玉川上水・緑道は残された貴重な自然だと住民から評価されるきっかけとなった。桜以外の要素も評価されはじめ、上水は清流と評され、緑道の草木とともに四季を通して親しまれるようになった。また住民は武蔵野に対するイメージを玉川上水・緑道の風景の中に見出していた。行政も玉川上水風致地区を指定し、武蔵野の野趣の保全を図るとともに、緑地のネットワークとしての利用を目指した。

3) 混乱 (1970～1990年頃)

玉川上水・緑道の新たな評価が生まれた一方で、周辺の開発は進み樹林地がほとんどなくなり、畑も減少し、屋敷林は途切れ途切れになったことで、かつての新田集落の姿が消えていった。逆に緑道は管理されたとはいえない状態であり樹木は大きく成長していき以前より鬱蒼とした緑地帯となった。しかし大きくなった樹木は水路を壊す原因となり、かつての護岸の役割は失われた。緑道には柵等が整備され、武蔵野の野趣は失われていった。これには住民から不満が聞かれ、住民団体による保全活動が開始された。

玉川上水は一部通水されなくなり、水路のみになった。また、周辺の分水も停止したり、暗渠化されていき親水の間が失われた。

4) 親和 (1990年頃～現在)

玉川上水・緑道の歴史環境保全施策により、緑道の樹木は雑木林として扱われるようになった。元々は護岸の役割があり、薪炭林とは本質的に異なるものだったが、どちらも雑木林として区別

されずに武蔵野の薪炭林の歴史を語る材料になった。

玉川上水に水流が戻され、親水の間として機能するようになった。かつて親水の間であった分水路は開発により減少しており、結果的には玉川上水に親水機能が移された形といえる。

また、緑道沿いには人が集うことのできる施設も設けられるようになっており、緑道の利用が幅広くなってきたとともに、玉川上水・緑道が周辺空間の利用にも影響を与えているといえる。

(2) 日常生活での関わり

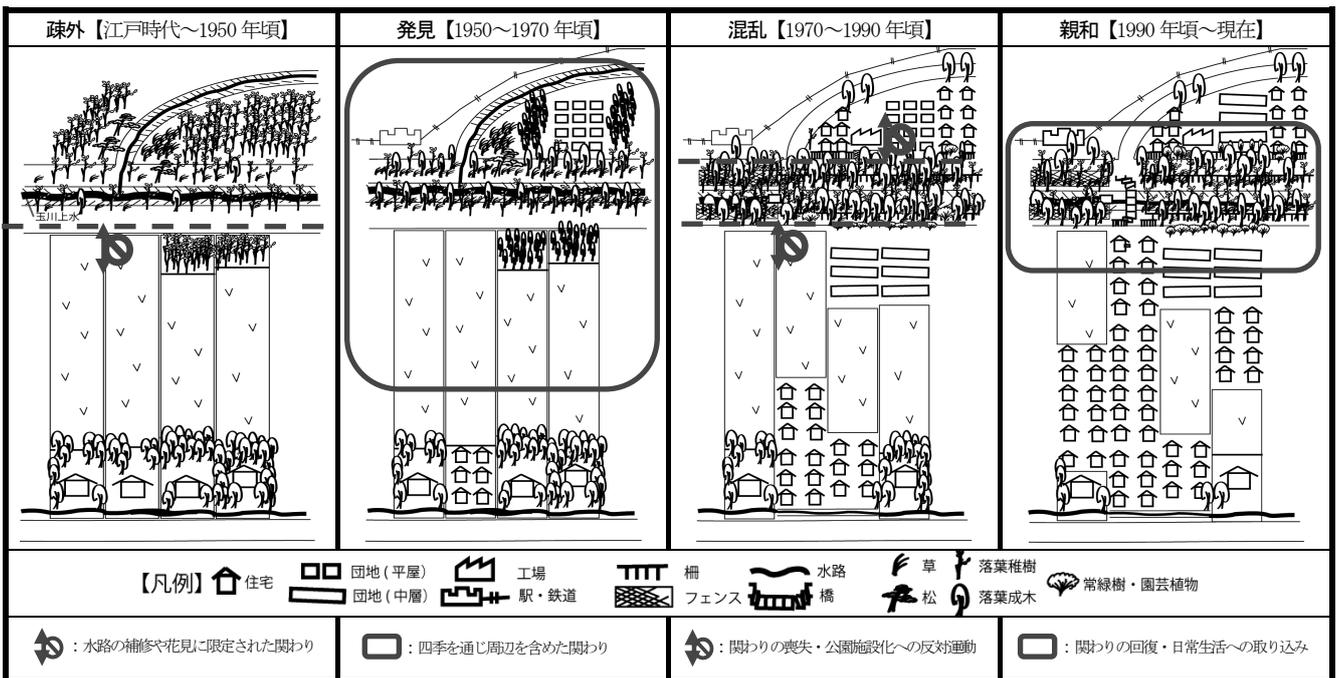
緑道沿いの住宅では、住宅と緑道を一体化させる傾向がみられた。これは、前述した発見-混乱-親和という緑地と住民との関わりの変遷を経る中で、もしくは経た結果、日常生活において緑地との親和性を高めようとした住民が比較的多いことを示唆している。現在の施策の中でも玉川上水景観軸としてこのような傾向を推奨しており、住民の意向と比較的合致した施策展開になっているといえる。また住民が親和性を高めるために緑道と宅地の境界に植栽しているのが多く見られたことから、今後かつての街道沿いに連なる屋敷林の帯ように住宅と緑地が一体化した緑地帯の景観が形成される可能性がある。

8. まとめ

対象地では住民による緑地との調和志向と、上水から緑地、さらに歴史的景観といった施策対象の広がりによって、玉川上水緑道沿いの特徴的な利用が形成されるようになった。

新田集落の中では玉川上水は遠ざけられた存在であったが、1950年頃から形成された新しいコミュニティの中では、玉川上水・緑道は自然として高く評価され、武蔵野の風景を見る場となった。その後開発によって玉川上水・緑道から武蔵野の野趣が失われ、周辺空間でも草地の消失や屋敷林・薪炭林・畑・用水が減少し、武蔵野を思わせる緑地は失われていった。しかし、それらの歴史性・自然体験・親水といった役割が広く評価されたことで、玉川上水および緑道一帯で保全され新たな形で取り込まれ、武蔵野の景観として再現されようとしている。これは緑地と住民との関わりが変化した結果空間をそのまま維持することはできなくなったが、新たな緑地と住民との関わりが生まれたことで別の空間の中に景観として取り入れられたと考えられる。

表-3 玉川上水緑道にみる緑地と住民との関わりの変遷



「混乱」期における都市公園整備に対する住民の反応は良好とはいえなかった。玉川上水緑道は元々水道用地として確保されていたために带状に長く続く緑地としての価値が高いのは確かであるが、緑地の空間だけを施策対象とするのではなく、住民が景観に対して新たな評価をしていたのを把握すべきだったといえる。その点、武蔵野景勝地指定や玉川上水風致地区指定の2つの施策では早期から武蔵野のイメージを活かして緑地保全を図ったことが、現在につながっているとも考えられ、評価できる。

住民が日常生活において緑地との親和性を高めようとするのは、今現在の緑地が好まれているからと考えられ、現在の緑地は比較的多くの人に高評価を得ているといえる。緑地の施策を考えるに当たって、住民の意見を把握する方法としてアンケートやヒアリング、住民説明会などの手法があげられるが、本研究で見てきた通り、現場で緑地とその周辺空間を把握することで、緑地と住民との関わりが明らかになる可能性もある。今後の緑地の保全・管理施策においては、緑地だけではなくその周辺空間の調査も必要である。また外構設計に入口があるかないかだけでも日常生活への取り込みに差が見られたが、風景や住民意識の上で周辺空間と緑道とのつながりが途切れている「疎外」期・「混乱」期では緑道に対する住民の評価はあまり良くなく、周辺空間と緑道のつながりがある「発見」期・「親和」期では住民の評価が良かった。このことから、緑地と住民との日常的な関わりを生むには緑地と周辺空間とのつながりを十分考慮するべきであるといえる。

補注及び引用文献

- 1) 例えば里山が生物多様性の場として評価されたことなど。
- 2) 竹内智子・石川幹子 (2009) : 都市拡張期における首都圏近郊地帯予定地内の緑地政策に関する研究—北多摩地域を対象として— : 都市計画学会論文集 No.44-3 , p877-882
- 3) 竹内智子・石川幹子 (2007) : 都市計画(鶴崎公園を事例とした)東京都計画公園緑地の変遷に関する研究 : ランドスケープ研究 70 (5) , p653-656
- 4) 上山肇・北原理雄 (1994) : 親水公園の周辺土地利用と建築設計に及ぼす影響 : 日本都市計画学会論文集 (29) , p361-366
- 5) 渡辺一二 (2004) : 図解・武蔵野の水路—玉川上水とその分水路の造形を明かす— : 東海大学出版会
- 6) 武田美恵・渡邊眞紀子・立花直美 (2003) : 玉川上水緑道における緑地空間構成と都市土壌性状の考察 : 社団法人日本建築学会 : 学術講演梗概集 D-1 , p679-680
- 7) 対象地における玉川上水・緑道の管理は江戸・東京と立川・小平両市(あるいは前身の町村)が共同で行ってきたため、江戸・東京の施策に準ずるものと考え、江戸・東京の施策だけを対象とした。
- 8) 国土地理院 (1924, 1927, 1930, 1935) : 2万5千分の1地形図, 府中
国土地理院 (1947, 1951, 1952, 1957, 1967, 1968, 1971, 1973, 1977, 1980, 1985, 1989, 1994, 1998, 2000, 2006) : 2万5千分の1地形図, 立川
- 9) 国土地理院 (1941, 1947, 1955, 1961, 1964, 1968, 1974, 1979, 1984, 1987, 1989, 1992, 1997, 2001, 2007)
- 10) 航空住宅地図帳 (1967, 1970) : 砂川町
航空住宅地図帳 (1965, 1972, 1977) : 小平市
ゼンリンの住宅地図 (1971, 1975, 1977, 1978, 1980, 1982, 1984, 1986, 1987, 1988, 1989, 1990, 1992, 1993, 1995, 1997, 1998, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010) : 立川市
ゼンリンの住宅地図 (1979, 1981, 1983, 1994, 1996, 1999) : 小平市
(立川市版で調査地全域がカバーされているため、小平市版は立川市版がない年のもののみ使用した。)

- 11) 小平市玉川上水を守る会 (1974, 1975, 1975, 1976, 1977, 1988) : 会報『玉川上水』
- 12) 渡辺一二 (2004) : 図解・武蔵野の水路—玉川上水とその分水路の造形を明かす— : 東海大学出版会
- 13) 立川市市史編纂委員会 (1978) : 立川市史 (下巻) : 立川市, 74pp
- 14) 小平町誌編纂委員会 (1959) : 小平町誌 : 小平町, 28pp
- 15) 茂木慎雄 (1939) : 東京緑地計画景園地の探勝 : 公園緑地第3巻2・3合併号, 129pp
- 16) 東京緑地計画協議会 (1939) : 東京緑地計画 : 公園緑地第3巻2・3合併号,
- 17) 立川市 (1958) : 都市計画指定資料
- 18) 都市計画協会 (1958) : 東京都三多摩地方都市計画説明書 : 都市計画協会, pp69
- 19) 芦原由紀夫 (2005) : 東京アーカイブス よみがえる「近代東京」の軌跡 : 山海堂
- 20) 東京都公園協会 (1985) : 東京の公園 110年 : 東京都建設局公園緑地部, p192-193
- 21) 財団法人日本都市センター (1973) : 玉川上水みどり計画 : 財団法人日本都市センター
- 22) 東京都企画報道室計画部 (1981) : マイタウン東京 '81 : 東京都企画報道室計画部, pp49
- 23) 東京都環境局 : 玉川上水歴史環境保全地域
(http://www.kankyo.metro.tokyo.jp/nature/natural_environment/tokyo/area/43_tamagawajyosui.html) 2010.2.4 参照
- 24) 東京都都市整備局 : 玉川上水景観基本軸
(<http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/kenchiku/keikan/keikaku09.pdf>) 2010.2.4 参照
- 25) 文化庁 : 玉川上水 : 国指定文化財等データベース
(http://www.bunka.go.jp/bsys/main/details.asp?register_id=401&item_id=3375) 2010.2.4 参照
- 26) 東京都水道局 (2009) : 史跡玉川上水整備活用計画 : 東京都水道局
- 27) 小平町誌編纂委員会 (1959) : 小平町誌 : 小平町, 46pp
- 28) 西武鉄道 : 西武鉄道の年譜 : 西武鉄道 Web サイト
(<http://www.seibu-group.co.jp/railways/company/history/annals.html>) 2010.2.4 参照
- 29) 小平町誌編纂委員会 (1959) : 小平町誌 : 小平市
- 30) 国立音楽大学 : 沿革
(<http://www.kunitachi.ac.jp/introduction/history.html>) 2010.2.4 参照
- 31) 東京都教育委員会 (1985) : 玉川上水文化財調査報告—その歴史と現況— : 東京都教育委員会, pp37
- 32) こたいら水と緑の会 (2002) : 用水路昔語り第一集
- 33) 東京都 (1976) : 玉川上水緑道写真集 : 東京都
- 34) 喜平図書館所蔵の小平監視所付近の写真(1957年撮影と1984年撮影)を比較した。
- 35) 玉川上水を守る会 (1975) : 会報『玉川上水』, 第1号
- 36) 東京都水道局 (2007) : 玉川上水保存管理計画
- 37) 東京都公園緑地課の工事台帳を閲覧した。
- 38) 東京都水道局 (2010) : 玉川上水整備活用計画
- 39) 玉川上水を守る会 (1984) : 会報『玉川上水』, 第12号